お兄ちゃん面変態幼馴染の溺愛処女強奪スイッチ

体験版

がら堂／どん丸

Attention

高校生を含む１８歳未満は閲覧禁止です。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited.

登場人物

・柚子（ゆず）
十八歳。大学生。
冬馬がお兄ちゃん面してくるため、女の子として見られていないと落ち込んでいる。チョロくて流されやすい。処女だが知識はある。

・冬馬（とうま）
二十三歳。社会人。百七十八センチ。
自分を「お兄ちゃん」と呼び、柚子を甘やかしかわいがっている。
心配性で過保護で柚子を丸め込むのが得意。

一、陥没乳首

「はぁー……」
「柚子、どうしたの？　悩み事？」
　とある金曜の夜のことである。
　顔を覗き込んできた人――冬馬君の顔が不安げなのを見て「しまった」と口を閉じる。冬馬君は私に対して大分心配性で過保護なので、悩んでる姿は見せない方がいいのだ。
「なんでもないよ」

「そんなことないだろ。お兄ちゃんには言えないこと？」
出た。冬馬君のお兄ちゃん面。
隣に座った冬馬君に、ムッと唇を尖らせる。
冬馬君は、私が七歳の時に隣に引っ越してきた五歳上の幼馴染だ。
血の繋がりは微塵もないし、お兄ちゃんでもなんでもない。故に顔が似ているはずもなく、丸顔童顔の私に対し、冬馬君は涼やかな目元の美青年。
彼が引っ越してきてすぐの時に「一人っ子だから妹が欲しかったんだ」と爽やかに微笑まれ、同じく一人っ子の私も「お兄ちゃん欲しかったの！」と速攻で懐いてしまった。お互いの親は微笑ましげに見ていた。
結果、冬馬君は、私のお兄ちゃんポジションについた。それも甘

いタイプの。私も根が真面目だったので特に悪さすることはなく、おかげで冬馬君にいい子いい子とよしよしされることが多かった。そんなことをされれば、私だって、冬馬君のことが大好きになるしかない。

しかし流石に、高校生になった頃。これおかしくない？　と気がついた。

だって、ただお隣さんなだけの二十歳の大学生が十五歳の女子高生に添い寝するのだ。

これはヤバイやつでは？　とお兄ちゃんって呼ぶのを辞めてみたり、冬馬君と過ごす時間を減らすために学校から帰るのをわざと遅くしたり（これは心配され怒られたからすぐやめた）、土日は友達の家に泊まったりしたんだけど、結局、冬馬君は「妹離れ」をしな

かった。
でも、それは、非常に困る。
だって私は、冬馬君のことが男の人として好きなのだ。私は妹じゃなくて、彼女になりたい。
なのに――大学生になって一人暮らしを始めた私は同じく一人暮らしをしている冬馬君とまたお隣さんになり、ほぼ毎日お互いの家に入り浸る状態が続いていて、それはまあいいんだけど、なぜか、今――冬馬君の膝の上に乗せられてしまっている。
「お、重いでしょ、おろしてっ！」
「だーめ。柚子が言うまでおろさない」
「ううっ！」
恋する乙女としては、この体勢は、非常にキツい。冬馬君の膝の

上に座らされて、後ろからお腹に腕を回されて抱きしめられている。冬馬君が美味しいものいっぱい作ってくれるからちょっと太ったのに……。

「柚子、お兄ちゃんに教えて？　ね？」

「んっ……！」

耳元で低く囁かれて、身体が変に反応する。冬馬君は顔だけじゃなくて声もいいのだ。

恥ずかしくて離れようとしてもお腹をぎゅっとホールドされているし、逃げられない。

力が強い、と絶望していると、「ねぇ柚子、何があったの？」と優しく聞かれた。優しいけど逃してくれない圧を感じる。

「そ、そこで喋んないでっ……」

「どこ？　ここ？　ふーっ……♡」
「だっ、だめだってばっ！」
わざとらしく耳に口を当てられて息を吹きかけられ、ビクビクと肩が跳ねてしまう。やめてと言っても聞いてくれず、吐息がくすぐったくて身を捩ると、余計に密着してしまった。
兄妹ではこんなことしないでしょ！　お兄ちゃん面するならもっとちゃんとして……！
「すんすん……柚子の匂い好き…♡」
「ひゃあ！　やだ、においが嗅がないでっ！」
「ン、ね、柚子、言う気になった？」
「言う、言うから、耳やめてっ……！」
やっと解放してくれた時にはもうくたくただった。冬馬君は満足

そうに私の頭を撫でている。悔しい。
「……あの、その、えーっと……」
「うん」
「……言わなきゃダメ？」
「ダメ。嘘ついてもわかるからね」
「うう……。………が、変なの……」
「え？　何？」
「だ、だからぁ、おっぱいが、へんなのっ……！」
泣きたくなりながら目をぎゅっと閉じて白状すると、頭上でぽかんとした気配がする。わかる、わかるよ、だから言いたくなかったんだよこんなことっ……！
「おっぱいが変、って……おっきいこと？」

「ち、ちがくて……」
冬馬君もそう思ってたんだ！　と顔が真っ赤になる。私は童顔に似合わないくらいに胸のサイズが日々成長していてコンプレックスなのだ。
「お兄ちゃんがおっぱい確認しようか？」
「へっ⁉」
とんでもないことを言われた気がして素っ頓狂な声が出る。
「ね、お兄ちゃんがおっぱい見てあげる。そうすれば安心するんじゃない？　ほら、おっぱい出して？」
「う、で、でも……」
「恥ずかしい？」
恥ずかしいに決まってる。恥ずかしくない人はただの痴女。そう

思いながら、小さく頷く。
「そっか。でも、俺は柚子のお兄ちゃんだから。裸見るのくらい、普通だろ？」
「う、うーん……？」
いや、どうかな？　と首を傾げるけど、冬馬君は私を離さない。
「お兄ちゃんは柚子のことが心配で心配で仕方ないの。見て安心しなきゃ、仕事手につかなくなっちゃうよ。だから、ね、おっぱいだしてごらん？」
「う……」
初めに言っておくが、冬馬君は私を丸め込む天才だ。どう言えば私が冬馬君に逆らえなくなるか、よーくわかっている。
だから、おっぱい見せるなんて絶対おかしいのに、後で後悔する

はずなのに、私は丸め込まれてしまった。
「わ……笑わない？」
「うん」
「引かない……？」
「うん」
「嫌いにならない？」
「どんな柚子でも大好きだよ」
「んっ……」
耳元で囁かれて顔が真っ赤になってしまう。
冬馬君は私のこと妹として思ってるだけって、わかってるのに。
ドキドキしてしまってどうしようもない。
「ほら、お兄ちゃんに、柚子のおっぱい見せてごらん？」

優しく言う冬馬君に観念して、ブラウスのボタンに手をかけた。
恥ずかしいけど我慢して前を開き終わると、ぷちっとブラジャーのホックを外す。途端、たゆんと揺れながら胸が現れた。
「…………………」
「と、冬馬君……？」
「ああ、ごめん。………陥没乳首ね」
「うう……へ、変、だよね……？」
「全然変じゃない。最高だよ」
「え？」
「うん。最高。……あ、隠さないで。ちゃんと見るから」
「んっ♡」
下乳を手のひらで持ち上げるようにすくわれ、変な声が出ちゃっ

て内頬を噛む。
私が変な声を出してしまったことに気づいていないのか、冬馬君はじい、と私のおっぱいを見た。
恥ずかしすぎて、身体がぞわぞわしてくる。
「おっぱい大きいね。こんなおっきいって知らなかった。サイズいくつあるの？」
「へ⁉　あ、えと……言わなきゃダメ……？」
「ダメ」
「んん……………F、カップ……」
「…………へぇ」
「ぁっ⁉♡」
むにゅん♡　と急におっぱいを揉まれて、また変な声が出る。で

も冬馬君は気にせずに続けた。
「乳首はうすーいピンクだね。乳輪もおっきいけど、色が薄くてあんまり目立たない」
「あぅ……♡」
コンプレックスのそこを指の腹でつぅ♡　と撫でられて、身体がぴく、と震えてしまう。
「と、冬馬君、やっぱり、やめ……んっ⁉♡」
「大丈夫、お兄ちゃんがどうにかしてあげるから。ね？」
「ぁ、やっ……♡」
「陥没乳首は治るらしいし。お兄ちゃんがやってあげるね♡」
「あんッ！♡」
隠れてる乳頭をほじるみたいに乳輪の中心に指をぐりぐりと押し

付けられ、思わず腰が浮いた。両方のおっぱいをされてるから、へんな感覚が倍くる。
「と、冬馬君っ、これやだっ……♡　変な感じするっ……♡」
「陥没乳首はおっぱい大きい子にたまにいるらしいから、心配しないで♡　お兄ちゃんがちゃんと、乳首こんにちはさせてあげる♡ね、これでもう恥ずかしく無くなるよ♡」
「んぁ！♡　冬馬く、や、あんっ！♡　これ、だめぇっ……！♡♡」
「はぁはぁ、声エッロ……♡　大丈夫大丈夫、恥ずかしがり屋さんの柚子のかわいい乳首、お兄ちゃんがほじほじしてあげるから♡」
　後ろから抱き込まれて耳元で喋られながら乳首をほじほじされて、頭がぼーっとしてくる。そのせいで、冬馬君の息が荒いことに気が付かなかった。

やめてってってもやめてくれないし、それに……気持ち良すぎて、抵抗できない……っ♡

「恥ずかしがり屋さん、中でこりこりーってしてきたね♡　もうちょっとほじほじしたら、出てきそうかな？♡」

「あっ……あッ♡　で、出てくる……っ？♡」

「うん♡　だから、もっと強ーくほじほじ♡　するね？♡」

「ひゃあんっ!!♡♡」

くりゅっ♡　くにくにくにっ♡♡

おっぱいの中で、敏感になった乳頭を押し潰され、捏ね回される。

びくんっと背中を仰け反ってしまって、頭の中がぐちゃぐちゃになって、何より、冬馬君の様子がいつもと違うのが、怖い。

「ふ、あ♡　あ〜っ♡　それ、やだぁ……っ♡♡」

「うんうん、でも、乳首、もう少しでぴょこんっ♡　て出てくるからね♡　柚子の陥没ピンク乳首超エロくて好きだけど、出てきたところもお兄ちゃん見たいな♡」
「やぁ、み、見ないでぇ……♡」
「なんで？　お兄ちゃんに乳首見られるの、普通だよね？」
「そ、それは、その……」
恥ずかしすぎる。だって、そんなことされたら私、絶対変な声でいっぱい出しちゃう……っ♡
そんなこと考えちゃって、世間一般の兄妹だっておっぱい見せないってことに気づけない。
そう思ってる間も乳首ほじほじこりこり♡　されてて、どんどん声が大きくなっていく。

「お♡　あっ♡　んあぁ……♡」
「柚子のおっぱいおっきくてやわらかいから、乳首ほじほじするとぷるんぷるんっ♡　って揺れて超エロいね♡　もっとおっぱいぷるんぷるんさせながら乳首ほじほじしてあげるね♡」
「あっ！♡♡　や、冬馬く、だめ、ほじほじしないで……っ♡」
「えー、どうして？」
「だ、だって、んぁあお～……ッ♡♡　声、へんなこえ、でちゃううっ♡」
「うんうん、出そ♡　お兄ちゃん、柚子の変な声大好き♡　録音して毎日聴きたいくらい♡　変な声も乳首も出そうね♡　柚子はいい子だからできるよね♡」
「や、出ちゃう、ほんとに、出ちゃうっ！♡♡　声も、乳首もぉ、

出ちゃうよぉっ…………！♡♡」
「出しちゃえ♡♡」
「おっ!?♡♡♡　あっ…………！♡♡♡」
冬馬君が指をおっぱいの中から抜いた瞬間、ぴこんっ♡♡　とカチカチになってるおっきめの乳首が両方とも一緒に飛び出した。
「おっ♡　はぁはぁ、柚子の乳首でっか♡　えろすぎだろ♡　ふぅーっ、柚子、えっちな乳首、こんにちはできたね♡　えらいえらい♡」
「やぁんっ……！♡♡」
飛び出したこりこりの乳首を指の腹で優しくよしよしよし♡　されて、お股がもじもじしてくる。こんなおっきい乳首見られるの恥ずかしいし、でも、よしよしされると、嬉しくもなっちゃう……。

「冬馬君、だめっ、見ちゃやだ、触っちゃだめっ……！♡♡」
「大丈夫だよ、可愛いよ♡　デカくて下品なのにピンク色で超かわいい♡　お兄ちゃんがしゅこしゅこしてもっとおっきくしてあげるね♡」
「あッ⁉♡♡　あひっ♡　あっ！♡♡」
冬馬君は親指と人差し指でおっきい乳首をきゅっとつまむと、そのままシコシコ♡　と擦り始めた。ずっと隠れてた乳首にその刺激は強くて、変な声が止まらなくなる。
「恥ずかしがり屋のデカ乳首ちゃんいっぱいしこしこしてあげるからね♡　ほら、ほら♡」
「お⁉♡♡　やらっ♡　らめ、あ♡　あ♡♡　おっぱいきもちいいのやらぁっ！♡♡」

「気持ち良いならやめないよ♡　ほら、デカ乳首ちゃんも気持ちいいの大好きだから、もう隠れたく無いーってビンビンになってる♡
はぁはぁ、よくこんなエッチな乳首隠してられたね♡　これからは毎日お兄ちゃんが乳首ほじほじしてあげるから安心してね♡」
「やらぁっ♡♡　もうやめてぇっ♡♡　ひぅんっ……おっ♡♡」
たまにピンピンっ♡　って弾かれたりカリカリっ♡　って引っかかれたりしながら激しく扱かれて、気持ち良くておかしくなるっ♡
これもう嫌なのに、冬馬くんは全然やめてくれないっ……♡
「あ〜ッ♡♡　それだめっ♡　らめなのっ♡　つよいぃっ♡♡」
「これ？♡　こうやって爪でかりっ♡　て引っ掻かれるのが良いんだ？♡　いいよ、お兄ちゃんがもっとしてあげる♡」
「ひッ！♡♡　あっ……！♡♡　あーッ!!♡♡　やだ、やぁあッ！

♡♡♡」

「柚子、嘘つくのはだめだよ？　こんなに乳首勃起させて、腰揺らしてるんだから……お兄ちゃんにデカ乳首いじめられて嬉しいんでしょ？♡　素直に認めてごらん？　そしたらもっともっと可愛がってあげるからさ♡」

「んあッ!?♡♡♡」

ぎゅう――――！♡♡　と乳首を摘まれながら引っ張り上げられ、身体が跳ね上がる。

「あ、あ、あ、はぁ、はぁー、うぅ……♡♡」

「あー、かわい……♡　ね、柚子はお兄ちゃんにデカ乳首虐められて喜ぶ変態さんです♡　って言ってみよっか？♡　柚子はいい子だから言えるよね？♡　だって、本当のことだもんね♡」

「ふぇ……？♡」
そんな、そんなこと言えない……♡　言えるわけないっ♡　ふるふると頭を横に振ったけど、冬馬君は乳首をぎゅっ♡　と抓ってきた。
「おっ♡♡」
「こーら♡　言えなかったら、ず――――っと乳首カリカリしちゃうよ？♡」
「や、やだぁ……っ！♡　ぁ、あぁんっ！♡♡」
「だったら言わないとね♡♡　ほら、乳首、カリカリ♡　あは、さっきまで恥ずかしがり屋さんで隠れてたのに、今は真っ赤になってる♡　乳首も嬉しくてぴくぴく震えてるね♡　お兄ちゃんに触って欲しかったんだよねぇ♡　よしよし♡」

「おッ！♡♡　やだっ♡　やめてぇッ！♡♡　ゆうから、ゆうからぁっ……！♡♡」

「よしよし、言ってごらん♡」

「ゆ……柚子はっ、で、デカ乳首、いじめられてよろこぶっ、変態さん、ですっ……んんんっ！♡♡」

　これ以上されるのは我慢できなくて言ったのに、冬馬君はぎゅーっ♡　って乳首を摘んで、ひっぱって、こりこりこりーっ♡　ってねじってきた。

　なんで、なんで？　言ったのにっ……！

「はぁー、かわいすぎ♡　かわいくてエロくて変態さんで柚子は最強だね♡　勝てる気がしないなぁ♡」

「あ、だめ、ゆったの、ゆったのぉ、ゆったからやめて、やめてぇ

っ♡♡」
「ん？　柚子はお兄ちゃんにデカ乳首いじめられて喜ぶ変態さんなんでしょ？　やめない方がいいよね？♡」
「やだ、やだ、冬馬君、ゆるして、も、だめなの、出ちゃうのっ……！♡♡」
「…………出ちゃう？」
「お、おしっこ、出ちゃうからぁ……っ！♡」
「えっ!?」
「だから、お願い……！♡　トイレ行かせて……っ！♡」
泣きそうになりながら必死で懇願すると冬馬君は手を離してくれた。
やっと解放される……と思ってほっとしたけど、冬馬君は私のズ

ボンとパンツを引き摺り下ろして、子供におしっこさせるみたいに、後ろから膝の裏を持って足を持ち上げた。

「は、え!? え、え、ぁ、や、やだ！ 冬馬君、これ、やだぁ！」

「はぁ、あ〜〜、やっぱ♡ 柚子、かわいすぎ♡ おしっこもれちゃうの？♡ はぁはぁ、あ〜〜、ほんと好き……♡ 全部ツボ……♡」

「と、冬馬、くん……？」

「やば、トんでた。あ、待って、ちょっと角度変えるから……ね♡ ほら♡ 鏡におっぱいとおまんこ丸出しの柚子が映ってるよ♡」

「ひッ!?」

ちょうど部屋にあった全身鏡に体の正面を向かされて、嫌でも自分の姿が見えてしまう。下半身は何にも身に付けていないし、足は

抱えられていて閉じられない。あんまりにもえっちで、恥ずかしくて、もっとおしっこが出そうになってきちゃって涙がこぼれる。

「やっ、やぁ……！　見ないで……っ！」

「どうして？　こんなに可愛いのに♡　ほら柚子の恥ずかしいところ全部見えてる♡　おまんこもお尻の穴もクリトリスもぜーんぶ♡　はぁはぁ、てか、パイパンじゃん♡　かわいすぎ♡　まさか剃ってる？　天然？♡　ん～、生えてる感じないから天然か……♡　はぁ～～、ほんっと好き……♡　いや、剃ってる柚子想像してもヤバい、ハァハァハァ、あ、やべ、ちんぽイライラするっ……♡　あぁ、おまんこぬるぬるなのも超分かっちゃうね♡　お兄ちゃんに見せてくれてありがとね♡」

「や、やや、やだっ！♡　見せてない、やだ、やだっ！　んんっ！♡

♡」
「はぁ、かわい、おまんこひくひくしてる……♡　お兄ちゃんに見られるのそんなに嬉しかったんだ？♡　お兄ちゃんも柚子のおまんこ見られてすごく嬉しいよ♡」
何言ってるかもよくわからないし言葉が通じない。いつも冬馬君は優しくて、私の話いっぱい聞いてくれてたのに。
こんな、こんなの、怖いし、恥ずかしくて死にそうなのに、それと同じくらい興奮してしまって頭が変になりそうなのが、一番嫌だった。
「はぁ、ね、柚子、おしっこするとこお兄ちゃんに見せて？♡」
「やだっ！　はずかしいよぉっ……！　やだやだ、冬馬くん、ゆるしてよぉっ……んんっ！♡」

「はぁはぁ、あ～～、恥ずかしがってる柚子、すっごくかわいい……♡」
そう言いながら、冬馬君の指先が、私のお腹の下辺りに触れて、とんとん、と指の腹で優しく叩いた。
「ひゃぅっ！♡♡」
「はぁ、柚子、おしっこ出そ？♡　あー、それとも、乳首いじった方がおしっこ出ちゃいそうになるのかな？♡　えっちな身体だね♡」
「ちが、う！♡　そんなんじゃないもん……！　ひっ!?♡」
くりくりくりっ♡
とんとんとんっ♡
乳首をくりくりされながらお腹を押されると、その刺激のせいで尿意のようなものがせり上がってくる。

「あは、おもらししたくなった？　いいよ、柚子、いっぱい出してごらん♡　お兄ちゃんがちゃんと見ててあげるからね♡」

「やっ、やっ！♡♡　やだぁッ！♡」

冬馬君は私を抱え直し、乳首をかりかりかりかりかりかり♡　と引っ掻いてきゅっと捻り上げた。それと同時に下腹部を強く押し込んできて、私は限界を迎える。

「柚子、ほら、我慢しなくていいよ♡　おしっこいっぱい出しちゃえっ♡」

「あっ！♡　だめっ！♡　でちゃう、でちゃうの、冬馬くん！♡♡みちゃ、や、あっ！♡♡　あ、ぁぁあっ！♡♡♡」

ぷしゃあっ！♡♡

頭の中が真っ白になった瞬間、おまたから勢いよく液体が出てき

て、鏡を濡らす。
きもちよくてはずかしくて、涙がボロボロと溢れてきてしゃくりあげてしまった。
「あ、やだぁ、あうぅ、ゔぅ～～～～っ……！」
「あれ……おしっこじゃなくて潮だね？」
「うう、ひどい、うぇえ……」
「んー、おしっこじゃないのかぁ……残念。………いや、でも、処女なのに乳首責めで潮吹きアクメキメるの最高だな？♡　柚子はやっぱり最高だよ♡」
冬馬君は嬉しそうに笑う。私が泣いているというのに、全然気にしていないみたいだった。
「うっ、ぐず……やだって言ったのにぃ……！」

「うん、ごめんね、泣かないで……んんん、いいや泣いても。潮吹いて泣いちゃうの可愛すぎるし。はぁ……♡　おまんこびしょびしょになっちゃったから、お兄ちゃんが舐めてあげよっか♡」

「……へ？　ひゃっ⁉」

急に冬馬君の膝から下ろされて、ベッドの上に仰向けにさせられる。その上両足を持ち上げられて足首を頭の横に押さえつけられてお尻が浮き、それはそれは恥ずかしい格好にさせられてしまった。

「ひい！　やだやだやだ！　冬馬君、これ、やだよぉっ……！」

「はぁはぁ♡　柚子のイキ潮まみれのパイパンロリまんこやばぁ……♡　なんでこんなおっぱいおっきいのにまんこはロリロリなんだろうね？♡　かわいすぎ♡　ちっちゃくてピッタリ閉じてるのに、ひくひくしてエロ汁じゅわじゅわお漏らししてる♡　あ――、チン

ポイライラする……♡」
「ひっ！」
冬馬君は今までに見たことのないような血走った目で私のおまんこを見ていて、ぞわぞわと震えてきてしまう。
「はぁはぁ、ロリまんこつるつるぷにぷにでおいしそ♡　食べちゃいたいくらいかわいい♡　あっ、そうだ、柚子のイキ潮、お兄ちゃんが全部舐めとってあげる♡」
「ひっ⁉」
目をギラギラさせた冬馬君は、私に見せつけるように長めの舌を出して、ゆっくりとおまんこに顔を近づけてきた。怖くて涙が出てくるのに、なぜかどきどきしてる。
「や、やだっ……！　汚いよっ！　やだやだ、お願いだからやめて

よぉ……っ！」
「あ――、かわいい、柚子が泣きながら怯えてるのほんとちんぽイライラするからやめな？♡　それにほら、柚子のおまんこ、綺麗だよ♡　パイパンでつるつるだし、むちむちしてかわいい♡　ロリロリなのに肉厚まんこなのエロすぎ♡　こんなすけべなまんこ持ってるってなんでお兄ちゃんに早く教えてくれなかったの？♡　男全員このまんこ好きだよ絶対♡　絶対お兄ちゃん以外の男にこのかわいいまんこ見せるなよ？♡」
「うう、うえぇ……こわいい……」
「あー、もう、また泣いて……♡　ちんぽイライラするからだめだって言ってるでしょ？　……はぁー、仕方ないな、早くちんぽハメたいけど、まずはお兄ちゃんのベロで綺麗にしてあげるね♡　れろ

ぉ……♡」

「ひっ！　やぁあああっ！♡♡」

　ぬるりとした感触が、おまんこの割れ目をなぞる。ぴちゃ、ぺちゃりと音を立てて、お尻の方まで垂れた私の体液が舐められていく。

「ン、れる、ちゅ……♡　はぁ、柚子のエロまんジュースおいしいね♡　一生飲みたい……♡　毎晩焼酎割りしたいな♡　んー、ウイスキーも合うか……？　毎日晩酌するからいっぱいイキ潮よろしくね♡　あ、おしっこでもいいよ♡　れちゅ、ぢゅるっ♡　ちゅう～っ、れるれるれるぅ♡」

「んぁッ！♡♡　や、冬馬く、んぅうっ！♡♡　はーっ、はーっ、だめぇ、おまんこ舐めちゃだめなの、やなの、あぁあんっ！♡♡」

「あ――、うっま♡♡」

わけのわからないことを言っている冬馬君は、おまんこ全体をべろべろと舐めて、汚れた口の周りをべろりと舐める。こんなとこ舐めちゃダメなのに、汚いのに、私から出たものを美味しそうに飲んでいる。頭がおかしくなりそう。

「いや、いやぁ、あっ！♡♡」

「あはっ、またえっちなお汁おもらししだしたね♡　可愛いなあもう♡　そんなにお兄ちゃんにいっぱい飲ませてくれるの？♡　ほんっといい子……♡　れろれろぉ、ぢゅるるっ♡　はーっ、うま♡　ぢゅるる、ぢゅるる♡　ンー、こっちもいじいじしてほしいのかな？♡　ちゅっ♡」

「あぅっ⁉♡♡♡」

尖ったところに……クリトリスにキスされて、腰がびくんっ♡

って跳ねる。なにこれ、しらない、こんなの知らない……！
「あは♡　柚子の乳首は恥ずかしがり屋さんだったけど、お豆ちゃんは目立ちたがり屋さんなのかな？♡　もうぷっくりしてる♡　あ、でも、皮かぶっちゃってるね♡　恥ずかしいけどいじいじしてほしいってこと？♡　はぁ〜、全くもー、お兄ちゃんがむきむきしてあげるしかないねっ♡」
「やっ、やだやだっ！♡　そこやだっ、やなのっあぅッ!?♡♡　んんん、ぁ、ひうッ！♡♡」
　指でクリトリスの包皮を引っ張られて、剥かれた状態でぐりぐりされる。敏感すぎるところを強くされて痛いはずなのに、それだけじゃなくて気持ちよくて、はずかしいのに、こんなのだめなのに、冬馬君がおかしすぎるのに、もっともっとって腰浮いちゃうよっ…

…♡
「あはっ♡　やっぱり、柚子はいじめられるの大好きなんだね♡　ちっちゃい時からそういうところあったよなぁ……♡　こんな童顔で泣き虫で可愛くてスケベな体してるくせにドMなのほんっと最高♡　ほら見てごらん、柚子のエロクリちゃん、勃起ちんぽみたいになってきたよ♡　お兄ちゃんにもっと強くされたいって言ってるんだよね♡　あー、エロすぎ……♡」
「ひ、ちが、違うのっ！　やぁっ！♡　あっ、あぁ！♡♡♡」
「はぁはぁ、大丈夫大丈夫、お兄ちゃんが柚子のぷっくりクリちんぽ、シコシコ♡　してあげるからね♡」
「いやっ、だめっ……あぁあッ！♡♡♡」
冬馬君は親指と人差し指で私のクリを挟んで、上下に激しくしくしこ

しこし始めた。
　しゅこっしゅこっしゅこっしゅこっしゅこっしゅこっしゅこっ、しこしこしこしこしこしこしこっ♡♡
「あぅッ！♡♡　ひゃめっ、あっ♡♡　やだぁ、やだやだっ♡♡それだめなのぉ！♡♡」
「ふふっ♡　柚子ったら、すごい声♡　おまんこもレロレロしよっか♡　ほぉら、れろぉ♡　ちる、ぢゅるっ♡　ン、お兄ちゃんにおまんこ舐め回されながら、クリちんぽシコシコきもちいね？♡　れるぅ、ぢゅるる、ぐぷっ♡　はぁ……柚子のロリまんこもクリちんぽもおいしすぎてやばい……♡」
「ひっ！　や　だっ、やぁあっ！♡♡　も、やだ、また、ぁ、キちゃう、やだぁ、出ちゃうよっ、やめてぇっ！♡♡」

おまんこしゃぶられながらクリトリスを指でつまんで扱かれて、腰がへこへこっ♡　って浮いて止まらない……！　もうイキたくないのにぃ……！

「柚子、イキそうなの？♡　ん、ぢゅるっ♡　ぢゅるるッ！♡　あぁー、かわいい……♡　イキ顔見せて♡　イけよ、イけっ♡　イっちゃえっ♡　お兄ちゃんの顔にイキ潮撒き散らしながらイケよっ♡♡　ぢゅぷぷ、れろれろれろぉんっ♡」

「やぁっ、だめぇ、見ないでっ！　あっ、あっ！♡♡　出ちゃうッ、出ちゃう、あぁっ！♡♡♡」

「ん、ぢゅう～っ♡♡」

「やぁお～～～ッ！♡♡♡」

ぷしゃあぁあ……っ!!♡♡♡

おまんこから勢いよくおしっこみたいなのが出て、身体から力が抜けていく。
それで冬馬君の顔が濡れてて、どうしよう、やっちゃった、と涙が出てくる。
「はーっ、はーっ……♡　うぁあ……ごめんなさ、んうう、とーまく、ごめんなさいぃっ……♡♡」
「ン、れろぉ、ごくごくっ……♡　はぁ♡　れろぉ♡　ン、やっぱ、おいし♡　柚子のイキ潮おいしいね♡　はぁ、イく度潮吹いちゃうなんて……♡　エロすぎ♡　あぁ、もうちんぽ我慢できねぇ……♡ね、柚子、チンポ挿れたいなぁ、いいよね？♡」
「ふ、ぇ？♡」
冬馬君のズボンのチャックが開いて、中から出てきたものを見て

びっくりする。
なにこれ、え、おっきいし、なんか、こわい……。
綺麗な顔の冬馬君のものとは思えない、太くて長くて、なんか、黒くて、硬そう？　で、グロテスクなものに、こわすぎて涙が出て来そうになる。
「や、やだっ、こわいよ、やだよっ……！」
「あ、そんな怖がらないで。大丈夫だよ。お兄ちゃんのちんぽは紳士だからね♡　…………多分」
「たぶんっ⁉」
怯える私に覆い被さってきた冬馬君は、「力抜いて」と囁いた後、おまんこに固いものをあてがってきた。
「や、やだっ！　それ、だめだよ、せ、セックスだよっ……！　だ

め、だめ！」
「うん、セックスだね♡　お兄ちゃんとセックス、したいよね？♡」
「だ、だめだよぉ、兄妹じゃセックスなんてしないもんっ……！」
「大丈夫だよ、俺たち兄妹じゃないから♡」
「言ってることとおかしいよっ⁉」
あれほどお兄ちゃん面してきたのに、急にそんなこと言い出して、
冬馬君がもう何がしたいんだかわからない。
冬馬君とセックスしたくないって言ったらうそになるけど、でも、
これは違う！　もっとロマンチックな感じがいい！
「柚子とセックスできるならなんでもいいし。最初はお兄ちゃん面
してれば柚子が気を許してくれそうだったからお兄ちゃん面しただ
けだからね。今は呼んでくれなくなったけど、お兄ちゃんって呼ん

でくれてた柚子かわいかったなぁ♡　また呼んでね♡」
「何言ってるの!?」
「あとは、ほら、兄妹プレイって良くない？」
「ほんとに何言ってるのっ!?」
「いや、だって、かわいい妹の処女奪うのは全お兄ちゃんの夢だし……」
「もうやだぁっ……！」
「ほら、見て。柚子にイライラさせられたちんぽだよ♡　柚子の処女まんこに挿入れるんだ。んー、柚子のまんこちっちゃいけど大丈夫かな？」
「ひぅ……っ！　や、やだぁ、だめ……っ」
「あー、やっと柚子とセックスできる♡　イキ潮でびしょびしょの

柚子の処女まんこ、お兄ちゃんのガチガチになったちんぽハメハメしようね♡」

「や、やだぁっ、いれないでっ！」

「はぁはぁはぁはぁ、柚子のまんこやばい、ぷにぷにつるつる、はぁはぁはぁ、あ――、やっとだ、やっと、やっと、柚子のまんこにちんぽぶちこめるっ……！♡」

「ひ、ぁ、あっあああッ……！♡♡♡」

意味わかんないこと言い続ける冬馬君が怖すぎていっぱい拒否したのに、冬馬君は私を押さえつけて、おまんこにぢゅぷ♡　って先端をくっつけて、硬くておっきいのをめりめり♡　って押し込んできた。痛くて苦しくて、涙が溢れてきた。

「いだいよぉ……！　ぬいでぇ、やだぁ……っ!!」

「っくぅ、はぁっ……♡　あ〜〜、すげ、せっま……♡　もうちょいっ……♡」
「っあ⁉♡♡♡」
もう苦しくて苦しくて涙が止まらないのに、更にぐっぢゅううっ！♡♡　と奥まで入ってきて、息が止まる。
「あっはぁっ……♡♡　入った……♡♡　入ったぁ♡♡　柚子の処女まんこにちんぽ入っちゃったよ♡♡　あーっ、きもちいい……♡♡　サイコー……♡♡」
「やだぁ、やだぁっ！　なんでこんなことするのぉ……！　ひっく、うぇぇん……っ」
「ハァハァ、泣かないで、柚子……もっと興奮しちゃうよ……♡♡ハァハァハァ♡」

「ひぃっ！」

「俺はね、好きすぎておかしくなるくらい柚子が好きなんだよ♡　はぁ、柚子、好きだよ、大好き、愛してる♡　こんな好きなんだから、ね、ちんぽハメハメしても仕方ないよね？♡」

「し、仕方なく、ないよぉっ……」

「あ――、すごい、柚子のまんこ気持ちいいよ、ヤバイくらい気持ちいいし幸せ……♡　すっごく狭いけどあったかくてぎゅうって締め付けてきて……♡　あー、やっべ、すごい締まるッ♡♡」

「あっ、やぁっ！　やめてっ！♡　抜いて、抜いてっ！♡♡」

「むーり♡♡　はぁ、柚子、お兄ちゃんのちんぽハメハメきもちいいねぇ♡　あー、ずっとこうしたかったんだよ、初めて会った時からずっと♡　ね、柚子、お兄ちゃんのちんぽ気持ちいい？♡」

「やらぁ……っ、きもちくないぃ……っ！」

「ははは、うそばっかり♡」

「ひぁッ!?♡♡」

続きは製品版

お兄ちゃん面変態幼馴染の溺愛処女強奪スイッチ__体験版

2022年12月15日発行

♡　どん丸／がら堂

♡　Twitter：@garadou18,@donmaru18

レビュー・感想、励みになります。